

沖縄県伊平屋列島のウンジャミ・シヌグ伝承

原田 信之¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2019年11月20日受理)

正徳三年（一七一三）首里王府編『琉球国由来記』の伊平屋島の項には伊是名島のウンジャミとシヌグに関する記述があるが、伊平屋島や野甫島のウンジャミ・シヌグの記述はない。しかし、伊平屋列島（沖縄県伊平屋村・伊是名村）の有人島である伊平屋島、野甫島、伊是名島を調べると、有人島三島すべてにウンジャミ・シヌグが行われていたことがわかる。伊平屋列島のウンジャミは豊漁祈願の祭事とみられ、シヌグは子どもの成長を祝う祭事とみられる。野甫島のウンジャミには魚釣りや亀捕りの所作、シヌグには木馬に乗る所作があり、共に笑いを伴う雰囲気だったようで、注目される。伊平屋列島のシヌグは、伊平屋島田名と伊是名島が男児のみを祝い、伊平屋島我喜屋・島尻と野甫島が男児・女児を祝う行事となっている。通常、琉球列島のシヌグは「男の折目」とされるが、伊平屋列島の事例では、シヌグは「男の折目」とまとめることはできないことがわかる。

（キーワード）ウンジャミ、シヌグ、伊平屋島、野甫島、伊是名島

はじめに

ウンジャミ（海神祭）とシヌグは沖縄北部地方や中部の東海岸の島々で行われている行事である。ウンジャミが女の折目（季節の切れ目になる年中行事）、ウナイウガミ（姉妹拌み）といわれるのに対し、シヌグは男の折目、ウキウガミ（兄弟拌み）といわれ、祭事の内容、目的、由来は多様なものとなっている¹⁾。

沖縄本島北部の本部半島の北方海上約三十キロに位置している伊平屋列島は、伊平屋村に属す伊平屋島・野甫島と、伊是名村に属す伊是名島・屋ノ下島・屋那覇島・降神島・具志川島とを合わせて大小七つの島々からなり、かつては「伊平屋のななはなり（七離れ）」と呼ばれ、伊平屋島とも総称された。また、伊平屋村を後地（クシジ）、伊是名村を前地（メージ）と呼ぶこともある。現在、伊平屋村には田名・前泊・我喜屋・島尻・野甫の各集落があり、伊是名村には内花・諸見・勢理客・仲田・伊是名の各集落がある（これらのうち、仲田は十八世紀中期以後、内花と前泊は明治以後の新集落である）。伊平屋列島の七島のうち、有人島は伊平屋島、野甫島、伊是名島の三島である。この伊平屋列島は、伊平屋島から第一尚氏、伊是名島から第二尚氏の始祖が出たことでも有名である²⁾。また、江戸時代後期に藤貞幹という学者が『衝口発』という書を著し、神武天皇が恵平也島（伊平屋島）で生まれたと論じた。これに対して居宣長は『鉗狂人』を著し、貞幹の説を徹底的に批判した。結局、貞幹の『衝口発』の説は退けられた

が、貞幹と宣長の論争によって伊平屋島が注目されるようになった³⁾。伊平屋列島の伊是名島には美織所（チュラウインジョ）とよばれる平らな岩があり、そこにはイハヌマチガニ（伊平屋の松金）と伊江島のナカンカリマカト（仲村渠真嘉戸）との悲恋の伝説が語り継がれている。有名な琉歌「仲村渠節」は、この二人の恋物語を歌っているとされる⁴⁾。

本稿は、現地で採集した口承資料などの検討を通して、伊平屋列島の有人島である伊平屋島、野甫島、伊是名島の三島に伝えられてきたウンジャミ及びシヌグという祭事に関する伝承と祭事をめぐる諸問題について考察することを目的とする。

1 伊平屋島田名のウンジャミ・シヌグ

正徳三年（一七一三）首里王府編『琉球国由来記』には、ウンジャミ、シヌグに関するものと思われる記述がある⁵⁾。それらの記述から、ウンジャミは「海神祭」「海神折目」「年越海神折目」「大折目」、シヌグは「シノゴ折目」「年越シノゴ折目」と呼称されていたらしいことがわかる。また、祭事の時期は、地域によって、七月に実施する地域、十一月に実施する地域、年越に実施する地域という、三つの場合があったらしいことがうかがえる。そして、実施の時期は、時代とともに変化していったようである。例えば、辺戸村の項に「海神折目ー【割注】年越也ー七月シノゴ折目ー【割注】海神祭祀也ー」「年越海神折目ノ時」「年越

*連絡先：原田信之 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

シノゴ折目ノ時」とあることから、『琉球国由来記』が編集された十八世紀初頭頃の国頭間切（現在の国頭村）辺戸村では、年越に海神折目とシノゴ折目、七月にシノゴ折目が行われていたらしいことがわかる。ところが、十八世紀初頭頃から二百年余り後の昭和初期頃には、旧七月二十日後の亥の日にウンジャミとシヌグを毎年交互に行うように変更されていたようである⁶⁾。昭和初期までの二百余年間は、明治時代、大正時代、昭和時代と時代が大きく変化した時期にあたるので、祭事においても大幅な変革が行われたものと推定される。

『琉球国由来記』に記載されている各地のウンジャミとシヌグは、名護間切の名護村・喜瀬村、本部間切の瀬底村、今帰仁間切の今帰仁村・志慶真村・兼次村・諸喜田村・与那嶺村・崎山村・中城村・平識村・謝名村・仲宗根村・玉城村・岸本村・勢理客村・上運天村・運天村・郡村（古宇利島）、羽地間切の中尾村・田井等村・谷田村・真喜屋村・屋我村・我部村・松田村・伊指川村・古我知村・瀬洲村、大宜味間切の城村・喜如嘉村・屋古前田村、国頭間切の見里村・奥間村・比地村・宇良村・伊地村・与那村・謝敷村・佐手村・辺野喜村・辺戸村・奥村・安波村・安田村、伊江島（伊江村）、伊平屋島（伊平屋村・伊是名村）などで行われていたようであるが、現在では、これらのうちほとんどの地域で簡略化されたり行われなくなっている。

『琉球国由来記』の伊平屋島（現在の伊平屋村・伊是名村）の項には、ウンジャミについては「海神折目」、シヌグについては「シノゴオリメノ事」という記事があるが、どちらも伊是名島の事例となっている。『琉球国由来記』伊平屋島の項では、「伊平屋島」と項名が記されているものの、ほとんどが伊是名島の記述となっている。これは、『琉球国由来記』が成立した時期が第二尚氏時代（一四七〇～一八七九）であったことと関係していると推定される。第二尚氏の始祖は伊是名島から出ているため、伊平屋列島を代表する島として伊是名島の事例を主として「伊平屋島」の項に記されたのであろう。これに加えて、この「伊平屋島」の事例からは、『琉球国由来記』が成立期の諸地域の事例を網羅的に記述しているわけではないこともうかがえる。

最初に伊平屋島（伊平屋村）のウンジャミとシヌグについてみてゆく。伊平屋島には田名・前泊・我喜屋・島尻の各集落があるが、前泊は明治以後の新集落であることから検討対象から外し、田名・我喜屋・島尻の各集落について検討することにしたい。

『琉球国由来記』には伊平屋島田名集落のウンジャミとシヌグの記述がないが、田名にはウンジャミとシヌグが伝承されてきた。伊平屋島田名のウンジャミは、「民俗第四号」の「田名部落調査報告（伊平屋村）」に「十五日～十七日 ウンジャミ／十五日の晩、仲里家の庭にオオシルガ

ミ、ノロ、ダナンサ、ハミシガミ、ナラシヌが集まって二、三日後には喜界ガ島のノロ（昔台風で流されているのを伊平屋のノロが助けて友達となつた）と別れなければならないので名残りの宴である。仲里家では御馳走を作る。／十六日の晩には田名神社に二十名の神人が集まり各家庭から献納されたカーサームーチーをもらう。その後オオシルガミ、ヨートイガミ、イシドガミ、シルガミの四人が白衣装の棒を持つて二組に分かれ各組には普通の服装をした十才～十一才の女子三名をお供にして、十七日には船が出るからそれに間に合う様にしなさいと行列をしてふれまわるのである。／十七日はヌイシジチと云つて午前九時頃、二十名の神人が田名神社で拝み、オオシルガミ（黒い馬に乗る）、シドガミ、イシドー、ヨートイ、ナラシヌ、伊平屋ノロ、ハミシ、テンノロ、安里ノロ、他十一名の神人（この十一名は先着順に並ぶ）の順序に並んでマジキナのハンタに行つて東に向つて拝み、それから各人の馬に乗つてナートンチビの海岸に行く、そこで東の方に向つて合掌し、オー（アサデークの葉）をナートンチビの海岸に投げる。それが終るとノロ殿内や田名神社に引き返してこの行事が終つた事を告げるのである。その時テラコグチ（喜界カ島のノロが別れに際して感謝の気持ちをこめて歌つた豊年祈願の歌）を唄う。」⁷⁾と記されているように、かつては毎年旧暦七月十五日から十七日にかけて三日にわたって行われていた。この田名部落調査報告は琉球大学民俗研究クラブが一九六一年（昭和三十六）二月に調査したものであるが、その後簡素化されて、現在は旧暦七月十七日の一日だけで行われるようになっている。では次に田名集落で採集した現在の田名ウンジャミについての語りを示す。

〈事例1〉「今の田名ウンジャミ」

（今のウンジャミは、旧暦七月十七日の当日に田名神社に集まり）午前中、十時半頃からですね、十時半頃から始まって、何かあの、向こうナットンチビとこちらでは言ってるんですが、向こうで、女神の方々が、喜界島の神様を送る行事があるんですが、向こうまで行く時はもう、十一時ちょっと過ぎるんですね。それをやって、終わって、また家帰るんですね。

漕ぐ、何か、女神の方々がやって、それを終えて、行くんですね。馬はもういないんですね。二十年前だと、馬は何頭かおったんじゃないですか。今はもうほとんどもう車なんですがね。（近くの方が）馬持ってらっしゃるんですが、やっぱり、この女神、乗る方が、怖がって乗らないんですね。小さい馬です。

（女神は）今はですね、だいたい五、六名ですね。六名か七名ぐらいになりますね。沖縄本島に引っ越しの方々、代わりの方がおるんですがやっぱり、やりきれなくて、もうほとんどあれですね、亡くなったり、やられて。やっぱり、あれですね、全部が全部いっちゃらないですね。

（海に行った後は）その後は、午後四時か五時ぐらいか

ら、ティルクグチといって、歌を歌うんですね。女神を前にしてですね。⁸⁾

〈事例1〉は平成二十三年(二〇一一)時の語りである。今のウンジャミは、旧暦七月十七日の当日に田名神社に集まって午前十時半頃から始まり、神女たちが(船を)漕ぐしぐさをし、それを終えて十一時過ぎにナットンチビ(ナートンチビともいう)という所に行って神女たちが喜界島の神様を送る行事を行い、また家に帰る。ナットンチビに行くのに昔は神女は馬に乗っていたが、今は自家用車でやっている。神女は沖縄本島に引っ越したり、亡くなったりして、全部おらず、今は六名か七名ぐらいしかいない。ナットンチビから帰ってきた後は、午後四時か五時ぐらいから、神女を前にしてティルクグチを歌う、と説明している。

〈事例1〉の話者によると、現在、ウンジャミの前日には何も行事は行われていないそうで、鬼餅を配る行事も終戦後しばらくはやっていたが全部廃止されて今はしていないということであった。また、ティルクグチを歌う行事は田名商店の前の神女の家でもやっていたが、その神女が亡くなってから行われなくなっているそうである。

伊平屋島田名のウンジャミは、昔、喜界島のノロが首里に行く(または帰る)途中、風で田名に避難してしばらく滞在した事に由来すると伝えられている。田名のウンジャミでは、男神「田名のヒャー(田名ンサー)」が「乗馬行列」を先導するなどの重要な役割を担っている。田名のヒャーは田名村の創始者(根人)であった可能性が高い。筆者は、田名のウンジャミ由来で伝えられている、喜界ノロが避難したという出来事が実際にあり、その事が元となって現在の田名のウンジャミ祭りが成立した可能性が高いと推定している⁹⁾。

伊平屋島田名のシヌグについて『伊平屋村 田名字史』は「シヌグ祭には大城グエンナ(クワイナ)がありシヌグ毛に於てはサシミイと言う祭歌があった。が、昔習はしの祭費徴収関係の地頭^{じがしら}が十九人いて、その家から一人ずつの男少年を一組ずつ出動せしめ、田名之比屋の指揮の元にトーガメーという行事があった。これら少年はドジン、ハカマという白衣装仕度でウッカ入口御嶽の拝所の掃除をさせ、木の枝を持たせ部落内東西の道路を二手に分かれて出発し、部落内通行中の方が「南風ナザリ 北風ナザリ トーガメーイ」と大声で言うと、又一方が「北風ナザリ 南風ナザリ トーガメーイ」と言いながらウザナ森で合併し、一線となってマジャ御嶽まで行き拜んで帰る行事であった。／シヌグ祭は一部は田名屋に於て年中行事として祭祀として行っている。／その年に誕生した男児の健康祈願として家庭行事折米として今では定着している。」¹⁰⁾(傍線原田)と述べている。

また、「民俗第四号」の「田名部落調査報告(伊平屋村)」は田名の七月の行事として、「シヌグ(十九日頃)／母親が去年のシヌグ以後に生まれた男の子をシヌグ毛へつれ

て行く。その時カシチーハマグリのつゆを持参する。そこにはソバの葉で仮小屋が作られており中にはダナンサが居るので彼に子供を抱かすと、云うのは男の子は二十一才になると兵隊に行くので戦死しないで無事に帰つて来るのを願うのである。この行事が終つて家に帰ると親戚の者と共にこの子を祝う。翌日になると田名神社で二十名の神人による子供の健康を祈願する行事がある。ミキとカシチーを字から神人に与える。それが終ると田名神社からシヌグ毛までミチ歌を歌いながら行(く)カ)。シヌグ毛では白太鼓や青年男女の踊りが行われる。」¹¹⁾と記している。これらの記述から、田名のシヌグは、その年に誕生した男児の健康を祈願する行事であることがわかる。

「田名部落調査報告」(昭和三十六年二月調査)の記述に「男の子は二十一才になると兵隊に行くので戦死しないで無事に帰つて来るのを願う」という部分があるが、昭和三十年代半ばの伝承ではまだ第二次世界大戦時の記憶が祭事の祈願内容に影響を及ぼしていたことがわかる。このことから、祭事や祈願の内容は、時代に応じて適宜変容してゆくものであることが改めて確認できる。

田名のシヌグの日程について、宮城真治氏は「伊平屋村 田名のシヌグ」で「シヌグは十九日、二十日に行う」¹²⁾としているので、以前は旧七月十九日・二十日の二日であった時期があったようである。

つまり、田名では、近年はウンジャミが旧七月十七日の一日間、シヌグは旧七月十九日頃の一日間となっているが、古くはウンジャミが旧七月十五・十六・十七日の三日間、シヌグは旧七月十九・二十日の二日間で、シヌグは男児のみを祝う祭事であったことがわかる。

II 伊平屋島我喜屋・島尻のウンジャミ・シヌグ

伊平屋島の我喜屋集落・島尻集落にも、ウンジャミとシヌグが伝承されてきた(『琉球国由来記』には我喜屋・島尻のウンジャミとシヌグの記述はない)。

『伊平屋村史』が「我喜屋のウミイガキおもとシヌグ行事」の項で「古代島尻部落は、我喜屋部落からの分家住民であって、両部落で祝女神一人を配置されて、その下に根神と、根人が各部落にいて、古代から各部落の年中行事の祭祀は、最初我喜屋部落の神アサギで行事を行い、その後祝女が馬夫を出して西海岸の道を通って、島尻の神アサギで、同行事を挙行する慣わしであった。」¹³⁾と記しているように、かつて我喜屋と島尻では一人のノロが馬に乗って両集落を移動して祭事を行っていたようである。このことから、ウンジャミとシヌグについても我喜屋集落・島尻集落は同内容であったことがわかる。

我喜屋と島尻のウンジャミについて『我喜屋字誌』は「ウンジャミは十六日の恒例日で、シヌグは現在、十七日にきまっている。／本村では当日晩に、ナレクといって、十一

歳、十三歳、十五歳になる女の子を、三人か、五人選び白布ハチマキに、^{ドーじん}胴衣、^{カカン}下裳の装帯で^{かい}櫛（ウエーク）を持たせて、準備して神アサギに待機させる。／行事は各戸から献上したカーサムッチー（鬼餅）で、殿内火神所に祈願し、それから根神と根人が「スク」網で魚取りの動作を行ない、それが済むと、シド神を先頭に、根神、根人、ナレクの子供らを参加させ、円陣をつくって、船漕ぎの真似をして、オモロを唄って神遊びを行なう。それがすむと、シド神が、ナレクの子供らを海岸まで引き連れて行って、海岸に礼拝をして帰る。／それからシド神と、ナレクの子供が各戸廻って、兼ねて各戸の軒につるしてあるカーサムッチーを取り集める。我喜屋と島尻は行事を我喜屋ですませた。当日、島尻も行なうのであるから、我喜屋の餅を取り終ったら、また島尻に行って取り集めてくる。」¹⁴⁾（傍線原田）と記している。

『我喜屋字誌』の記述では、我喜屋と島尻のウンジャミは七月十六日当日の晩、神女たちが「スク」網で魚捕りの動作を行なったり、船漕ぎの真似をしたり、海岸に行って礼拝をし、各戸の軒につるしてある鬼餅を取り集めたりすることから、我喜屋ウンジャミの眼目は豊漁祈願にあり、ナレクという十一、十三、十五歳になる少女たちを祭事に参加させていることがわかる。昭和二年八月に宮城真治氏が記した「伊平屋旅行」ノートの「我喜屋 海神祭」の項には「七月十六日午後五時頃、アシャギに神職が集まる。／ヌル、ユチナ、ユムイ、ウィフィナ、ムッチャ（島尻・女神）はアシャギの中に座す。／ハミシ、シル、アキス（島尻・女神）はアサギの外に造った仮家の中に座す。／カーシャ餅を上げる。餅は各戸より米六勺五才宛徴収して造る。ユノーシに神酒を上げる。／六時頃、ハミシ、シル、アキス、辺戸（東方ならん）に向って手を合わす。」¹⁵⁾と記されており、ナレクの記述がないが、ナレクは神女の供神の役割なので宮城真治氏が記述を省略したとみられる。宮城氏「海神祭について」（昭和四年九月。昭和二年調査。「宮城真治資料6」）の田名海神祭について記した部分に「それより海神は二人宛二方に別れ、なれくと称する供神を三人宛伴れて部落の東部と西部とを分担して家々を巡る」¹⁶⁾（傍線ママ）という記述があるように、田名ウンジャミにもナレクといわれる少女たちが供神役として参加していたことがわかる。

我喜屋・島尻のシヌグについて『伊平屋村史』（『我喜屋字誌』・『島尻のあゆみ』も同文で引用）は「シヌグの行事は、毎年旧七月十七日に決まっているが、万一都合があって、延期する場合は、後日吉日を選んで行った。／シヌグ行事の趣意は子供の健康と子孫繁栄の祈願であって、昨年のシヌグの翌日から、本年のシヌグの前日までに誕生した男女子供の祈願祝である。／シヌグの当日午前中に、オーナザレーと云う行事があって、男子九才、十一才、十三才の子供三人を白ハチマキに、「ルージン」「ハカマ」の

服装に、ゲーン（ススキ三本）を持たせ、アンナサーと云う根人が、三人の子供等を引き連れて、最初子供の産川^{うぶがー}を拝み、それから各戸廻りにうつり、各戸の台所から入って二番座敷から出て行くが、廻る時はアンナサーが、太鼓をたたいて、オーナザレートカととなえたら、子供等はヒースエーホーフワイと合唱して廻った。全戸廻り終わったら、今度は西海岸にシヌグ地という場所があって、そこまで子供を連れて行って、兼ねて用意してある芭蕉の茎で造った筏舟に、ネヅミを乗せて沖に流す。これは全戸の悪魔を追い払う意味である。（中略）その行事を終って午後三時頃から、シヌグの行事を挙行する。男の子供は行事の聖地であるシヌグ毛という場所があって、その場所で行い、女の子供は神アサギで行う。この両場所では、祝女と根神は、神アサギに、男の根人はシヌグ毛に各々陣取った。／最初両方とも、シヌグ行事の立御願を行って子供等のくるのを待った。（中略）そのとき男の子は父親かまたは連人中の内から子供を抱え陣取った。根人に子供をだかすと、根人は子供を^{ひたい}だいて、兼ねて準備してあるミサフ（神酒）を子供の額に指先でなでて、健康祈願を行う。すべての子供がこの式を終ったら、各子供の家から持参して来たご馳走で祝宴に移る。（中略）祝宴のときシヌグ毛では全戸数が集まって行い、神アサギでは全戸の婦人が集まってお祝いを行う。さらに各家庭では祖先にも子供のシヌグお祝として赤飯と酒肴を供える。／このようにして行事祝を済ますと、今度は子孫繁栄との意味で、部落の代表者を神アサギからシヌグ毛まで、婦人連中が竹馬に乘せて、馬ドードーと大声で合唱して、太鼓をたたいて氣勢をあげた。」¹⁷⁾と述べている。

この記述から、我喜屋のシヌグは毎年旧七月十七日に行われ、その目的は男女の子どもの健康と子孫繁栄の祈願で、行事は男児がシヌグ毛、女児が神アサギで行うことがわかる。しかし、『伊平屋村史』が「我喜屋のウミガキおもとシヌグ行事」の項に「本行事は古代から、明治四十年頃まで、男の子供は初日に、女の子供は翌日に行っていたが、その後男女とも、当日同時に行うようになった。」¹⁸⁾と記していることから、我喜屋のシヌグは古くは二日にわたり行われていたが、明治四十年頃以降に一日となったらしいことがわかる。

我喜屋のウンジャミ・シヌグの日程について、宮城真治氏は「我喜屋の年中行事」に「ウンザミ祭 七月十六日、十七日／シヌグ祭 七月十八日、十九日」¹⁹⁾としているが、「我喜屋 海神祭」の項目に「七月十六日」とし、次に「十七日 シヌグ」²⁰⁾と記している。また、宮城氏は「伊平屋村の我喜屋のシヌグ」に「七月十七日／真川にて水なでして、女神三時頃アシャギに集合。／一年未満の子を、女児を女神にだかす。御重にて御酌。／△男児は父が連れて、シヌグナーにて男神にだかす。／ミキを児の額につける。ミキを父に呉れる。更にヌルの所にてなす。／△七月十八日／

七才、九才、十一才より出初める。（三年間か。然り）／真川、ウィヒナ、ヌンドヌチ、民家を巡る。／△ウナジャーレ トーカという。／△海岸まで行ってゲーンを捨てる。」²¹⁾（傍線ママ）と記している。つまり、昭和初年の調査によって書かれた宮城氏の報告による我喜屋ウンジャミ・シヌグの日程には、A「ウンジャミ…七月十六・十七日、シヌグ…七月十八・十九日」、B「ウンジャミ…七月十六日、シヌグ…七月十七日」、C「シヌグ…七月十七・十八日」、という三種類が記されていることがわかる。Aは明治四十年頃以前の日程とみられ、Bは現在の日程と同じであるが、Cがよくわからない。

『伊平屋村史』が「根神と根人は各行事場で、三日間宿泊して勤め、三日目の午後に立御願に対して「タムトノーシ」といって解御願^{ふとち}を行って、シヌグ行事の終りを告げたのである。（中略）オーナーザレーや、竹馬に乗せるのもすたれ、また三日間各所の行事場での寝泊りもせず、シヌグの当日で解御願^{ふとち}を済まし、またウムイガキのトンザマ唄も現在の人々はその曲を知らず、歌う人がいないのでともにすたれている」²²⁾と記していることから、以前の我喜屋・島尻のシヌグは三日間あったらしいが次第に簡略化されてすたれていったことがわかる。宮城氏のC「シヌグ…七月十七・十八日」という記述は、誤記の可能性に加え、かつて我喜屋・島尻のシヌグが三日間あったことと関係があるとも考えられる。ただし、島尻のウンジャミ・シヌグは現在行われていない²³⁾。

つまり、我喜屋・島尻では、近年はウンジャミが旧七月十六日の一日間、シヌグは旧七月十七日の一日間（男児・女兒同日に祝う）となっているが、古くはウンジャミが旧七月十六・十七日の二日間、シヌグは旧七月十八・十九日の二日間か旧七月十七・十八・十九・二十？日のうちの三日間で、シヌグは初日に男児・翌日に女兒を祝う祭事であったことがわかる。

III 野甫島のウンジャミ・シヌグ

野甫島（伊平屋村）の野甫集落にも、ウンジャミとシヌグが伝承されてきた（『琉球国由来記』には野甫のウンジャミとシヌグの記述はない）。

現在、野甫島と伊平屋島の間には昭和五十四年（一九七九）に完成した野甫大橋が架かって便利になったが、かつては舟で移動していた。野甫島には野甫集落があるだけである。では次に野甫のウンジャミについての語りを示す。過疎化が進んだ野甫島では古老の話を採集することが困難であったため、沖縄本島に移った野甫出身の古老から話を聞いた。

〈事例2〉「野甫のウンジャミ」

（野甫の）ウンジャミは、海の行事ですね。魚を釣るまね。そして、亀捕り——亀の産卵ですね——、に來た亀捕

る行事ですね。信仰行事だから、マネをする。

魚釣り行事は、ひもをですね、張って、そして、ちょっとした、いしやあ（？）にしてからですね、縄をだいたい、二十メートル三十メートルぐらい張って、それをゆっくりゆっくり引いてですね、「タマンが釣れるよ、ミーバイが釣れるよ」って魚の名前を呼んで引くんですね。

して亀捕り行事は、一応あのあれですよ、回ってですね、この、亀の格好に、昔の、あれを、こんな沖縄にぜんか（？）あるんですよ。ひらたいざん（？）。あれを、かぶってですね、走って回って、亀が産卵に来る状況ですね、あれまねしてですね。へえから今度は、網をかぶして、捕まえたということの行事であるわけですがね、ウンジャミは。

そして、その、ウンジャミの行事は、前はあの、道路のあれで小屋作って、しよったんですがですね。こっちで供える、このお供物といって、供えものは、各家庭から、魚をですね、蒸した、薫製にしたんですから薫製ですね。火で蒸した魚ですね、あれを、「このうちはじゃあちゃん（？）が大きいから、何人。そしてこのうちはいくら」と言うてから、決められていたんですよ。それを、一応集めて来て、その行事やってから、行事が終わったら分けてですね、食べよったんですが。ウンジャミとはそういう行事だったですね。薫製にして供え、供えて拝みよったですよ。

これは今いうあの、ノロ殿内の、壊されたノロ殿内で、向こう側に今でもしみとがわ（？）があるでしょ。あれのあの、道でやりよったんですよ。（壊されたノロ殿内の）前の道路で。小屋を作ってですね、この小屋の所でやりよったですよ。（祭りのためだけの）簡単な小屋を。木とカヤ（茅）でできた、簡単な作りの。

今いう旧暦の、七月の十六日ですね。ウンジャミ。（行事は神役の）皆さんがする、全員が。七人と竜宮の神様と八名ですね。集まって行事はするんだが、この、魚釣ったり、また亀を捕る行事などは、別にまたこの、あれが配られてたんですよ。（網をかぶしたり捕まえたりするのは）村の人がやる。（参加するのは全員ではなく）配られた方ですよ。今いう、班から一人二人こなしてから、あれですよ。任命何名ていって任命された方がですね。（神役以外）五六名ぐらい、七八名から五六名ぐらい、集めたじゃないですか。あ。（行事する所は）班じゃなくて、一カ所だから。（野甫では）一カ所ですよ。だから人は各班から言いつけられた方たち、集まるわけだが、行事する所は一カ所でやるわけです。（野甫では）五班ありましたね。（班から集まるのは）五名。（神役八名と）五名がこのウンジャミの行事に参加しとったことになるんです。²⁴⁾

〈事例2〉は野甫のウンジャミについての大変貴重な語りである（そのため、意味がよくわからない部分もそのまま文字化して「（？）」を付した。以下同じ）。野甫のウンジャミは海の行事で、魚を釣るまね、産卵に來た亀を捕るまねをする。魚釣り行事は縄を二十から三十メートル張

り、「タマンが釣れるよ、ミーバイが釣れるよ」と魚の名前を呼んでゆっくり引く。亀捕り行事は、亀の格好になるようにかぶりものをし、走り回って亀が産卵に来る状況のまねをし、次に網をかぶせて捕まえた動作をする。ウンジャミ行事は、以前はノロ殿内（今は壊された）の前の道路に木とカヤ（茅）のできた簡単な作りの小屋を作っていた。お供物は各家庭から火で蒸して薫製にした魚を集めて供え、行事が終わったら分けて食べた。ウンジャミは旧暦七月十六日に神役七名と竜宮の神様の八名が行うが、網をかぶせたり捕まえたりするのは村の人が行う。参加する村の人は全員ではなく任命された人。野甫では五班あったので、各班から一、二名が任命されて集まった五六名から七八名ぐらいが、神役八名とウンジャミの行事に参加した、ということであった。

伊豆味俊夫氏「野甫の拝所と年中行事」によれば、野甫のウンジャミ（野甫ではウンザミという）に参加した神役七名（ナナスホーイ）は、アマイ神、ノロ神、ユレミチ神、ノホヌシ神、ニツツ神、メーイ神、ウチガミ神であるといい、行事はミザシ御殿（今は壊された）の前の道路に御嶽からマーニの木を刈って来て簡単な小屋を作って行ったという²⁵⁾。なお、〈事例2〉の語りでは、ウンジャミを行う小屋はノロ殿内の前の道路に作ったとあるが、ミザシ御殿の語り違いとみられる。

〈事例3〉「野甫のウンジャミ」

竹竿ですね。縄を付ける。「タマンが釣れる」そして「ミーバイが釣れる」なんて言ってですね。タマンていったら沖縄の、魚の、代表はタマン、ミーバイ、そしてグルクンですね。それと、マチですね。マチィていったら、赤い魚で一番これは、一番の刺身用ですよ。刺身用に一番ですよ。そういう魚の名前呼んで、呼んでから、この糸を引きよったわけですよ。

参加した村の人がですね（この動作をする）。（集まった）五名の方がやりよったということですね。（次の動作が）亀の産卵。ざるですね。大きなこういう丸いざる。こんなかぶっていて、ゆっくりこれ走ったら、あとから網でですね、網をかぶして。早く捕まえたということ。ゆっくり歩いたら、網をかぶせられる。漁網だったですね。大笑いだったですよ。網かけられたのは私が子どもの時の記憶は、あれですよ。この亀が、逃げよったあれがあったですな。網かぶせられて逃げてですよ。しとるから。ざざざざざと逃げて。そういうあれもあったですね。漫才みたい。村の皆さんが見守っている中でやります。²⁶⁾

〈事例3〉も〈事例2〉の話者によるもので、野甫のウンジャミの雰囲気に関する貴重な語りである。魚釣り行事では、参加した村の人五名が竹竿に縄を付けて「タマンが釣れる、ミーバイが釣れる」などと魚の名を言って糸を引く動作をした。その次の亀捕り行事では、大きな丸いざるをかぶって亀の産卵のまねをした人がゆっくり歩くと、あ

とから漁網をかぶせて捕まえようとした。自分が子どもの時の記憶では、村の皆さんが見守っている中で、網をかぶせられた亀役の人がざざざざざと逃げる動作があった。漫才みたいでみんなが大笑いしたという。

田名のウンジャミでは神女たちが厳粛な雰囲気の中で行事を行うが、野甫のウンジャミでは、祭事を見守っている村の人たちがコミカルな亀の動作を見て大笑いしたという点が注目される。他地域のウンジャミでは見られない笑いを伴う雰囲気だったようで興味深いものがある。

では次に、野甫のシヌグについての事例を示す。

〈事例4〉「野甫のシヌグ」

シヌグはウンジャミの翌日だから旧の十七日ですね。七月の十七日、が、男のシヌグですね。そして十八日が女のシヌグですね。男のシヌグあれはシヌグモーという所ですね。で、村中の人が集まって、向こうで、あれですよ。子どもが生まれた年の子どもに。せでごちそうがですね、斤（きん）にかけて、戦前は斤だから、三十五斤までの目安だから。三十五斤といたらだいたい、お膳（ぜん）がこれぐらいでしょ、お盆のお膳ですね。お膳、だいたいこれぐらいだから、これの、深さがだいたいこれぐらいですね。ごちそう作ってですね。それと、その年生まれた男の子どもが連れられて来て。ここで出生願いですよ、シヌグといたら。ごちそうと一緒に連れて来て、出生はしっこ（？）お願いしよった行事ですね。（村中）全員一緒に集まってですね、今度は、この一応子どもたちのこの行事が杯（さかずき）してごちそう、全部配ってですね、皆さんに、村中の人に配って。配ったらですね、今度は、婦人会の方々が、ウシデークといてですね、この、あれがあるんですよ。ウシデークを舞ってですね、そして、にぎやかに、しよったですがね。ウシデークの舞いが入りよったですよ。だいたい、農業があるから、仕事から帰って、そしてあれしてから、日が暮れる直前、五時頃からですね。五時から始まって、夜にかけてです。昼じゃなくて男のシヌグは。

今度はまた、女のシヌグといたらですね、昼から。女のシヌグは。だいたい十二時ごろからじゃないですか、から、始めて。そして、それまでですね、結婚して子どもができない人はですね、模型の馬作りますよ、馬。木の馬ですよ、木馬。木馬作って、そして、それに乗ってですね、乗ってあれしてですから、子どもが生まれるというあれが、ありましたね。乗ると、子どもが生まれる。女の人が（乗る）。そして、昔のあの、芋を炊く、なべ（鍋）のふた（蓋）ですね、カマンタと言いますが。カマンタをですね、さお（竿）にーだいたい竿が、五メートルぐらいの竿にー、大きななべのふたをつる（吊）して、それをわざとかぶしてですね、こっちのお母さんが、「馬に乗ったよー、どうどう」してよ、通って行きよったですよ。（なべのふたを）つるして、後ろからですね、この女の方にわざとかぶ

してですね。して、そういう風にしてから子どもができたという方もありましたな。わざとかぶして。で、こっちのお母さんが「馬に乗りましたよ」ちて。女の方は、戦前は、女の方は馬に乗れなかったんでしょう。うちなんかの、あれにも、女の方が馬に乗るということはなかったですよ。男は乗るけど。頭に馬のつら（面）の形を、顔の形をあれた馬に、棒をつないでですね、しっぱ（尻尾）に尾を引かして。それで、こっちから、乗るといってもあれですよ、こんなになるわけですよ。股から。して、つかまえててですね、あれで、「どうどうどうどう」。「どうどう」と言うんでしょう、馬をしつけるのは。「どう、どう、どう」と言うんでしょう。持ち取る側から肩に綱でも引っかけていたんでしょうなああれ。よう子どもん時それ見ると一生懸命走って行ったんだが。歩いてやったら、鍋の蓋をかぶしてですね、して笑ったり「どうやどうや」ってね。あれは今言う漫才のあれじゃないかなあ。大笑いのあれで、行事だったですよ。それは場所はねえ、場所は今言う、アマイヤのお宮の。これ、個人のうちでもやっぱり、あれだったですよ。個人のうちの前に、ウガンジュ（拝所）があったわけですよ。そのうちの前でやりよったからね。アマイガミの、トゥンチ（殿内）の前ですね。アマイトゥンチの前ですね。²⁷⁾

〈事例4〉も〈事例2〉の話者の語りである。野甫のシヌグは、ウンジャミの翌日の旧七月十七日に男のシヌグ、七月十八日に女のシヌグを行う。男のシヌグはシヌグモーに村中の人が集まって、そこへ生まれた年の男児の家が三十五斤（約二十一キロ）のごちそうを作って持参し、酒やごちそうを全部村中の人に配る。次に、婦人会の人々がウシデークを舞ってにぎやかにした。農業作業から帰って日が暮れる直前の五時頃から始まって、夜にかけて行った。女のシヌグは、昼の十二時ごろから始めた。結婚して子どもができない人は、木馬を作ってそれに乗る。女の人に乗ると子どもが生まれるとされた。女の人木馬に乗ると、五メートルぐらいの竿に大きな鍋の蓋をつるし、それを女の人にわざとかぶせて、こっちのお母さんが「馬に乗ったよー、どうどう」と言って通って行った。そういう風になると子どもができたという人もいた。戦前は男は馬に乗るが女の方は馬に乗ることがなかった。頭に馬の顔の形をした面を棒につないで、尻尾に尾を引かせて乗るまねをして、つかまえて「どうどう」と言った。子どもの時にそれを見ると一生懸命走って行った。今の漫才のようで大笑いの行事だった。女のシヌグは、アマイガミのトゥンチ（殿内）の前に拝所があり、その前で行ったという。

野甫のウンジャミでは亀のコミカルなしぐさを見て村の人たちが大笑いしたというが、野甫のシヌグでも木馬に乗るコミカルな動作を見て村の人たちが大笑いしたという点が注目される。

〈事例5〉「伊平屋島各地区の生活改善運動」

村会議会でですね、生活改善のあれで、この拝所の統合と、そしてあらゆるこの儀式的この材料とかそういうものの廃止ということになったんですよ。（中略）村議会ですよ。（廃止をしたのは各集落とも）同じですが、一応多くは今までも（廃止を）続けてやってるのは野甫だけなんですよ。我喜屋も一ヶ月ぐらいで拝所を統合したんだが、（一ヶ月で不幸があって）それで大変といって元に戻してるんですよ、我喜屋は。そして田名はですね、田名は今の拝所が作られてる所、あれは拝所であるんだが、今でも続けておるらしいですがね。で、別の行事は統廃合したのかどうか私、それまで知りません。して、島尻は、あれ様子みてやらなければいかんということで、村中がですね、野甫とか田名とか我喜屋にさせてみてから良かったら統合したり廃止したりするということで、（中略）向こう島尻自体ただの一つも変わったことがないです。昔のままそのまま。²⁸⁾

〈事例5〉は伊平屋島各地区の生活改善運動についての語りである。戦後、伊平屋村議会で生活改善運動として拝所の統合とあらゆる儀式的材料などの廃止が決まった。廃止をしたのは各集落とも同じであったが、今までずっと廃止を続けているのは野甫だけである。我喜屋も一ヶ月ぐらいで拝所を統合したが、一ヶ月で不幸があって元に戻した。田名は今の拝所が作られているところで今でも続けているらしいが、別の行事が統廃合したのかどうかまでは知らない。島尻は様子を見る必要があるということで、野甫、田名、我喜屋にさせてみて良かったら統廃合しようとした結果、島尻では一つも変わったところがなく昔のままであるという。

野甫では拝所の合祀や、行事や祭祀の統廃合がかなり強く実施されているが、他地域と異なり不都合な出来事が起きなかったため、統廃合されたまま今に至ったという点が注目される。なお、話者がその後の経緯を知らないと言っている田名については、統廃合後に種々都合の悪い事が生じたため、すべて元に戻したという²⁹⁾。伊平屋島・野甫島だけでなく、戦後、沖縄県の各地で拝所の合祀や、行事や祭祀の統廃合が実施された。戦後に広く実施された、拝所の合祀や、行事や祭祀の統廃合をめぐる問題については、さらに調査研究する必要がある。

野甫では、近年はウンジャミが旧七月十六日の一日間、シヌグは旧七月十七・十八日の二日間（男児は十七日・女児は十八日に祝う）となっているが、関連資料が少ないため古くはどうであったのかはよくわからない。

IV 伊是名島のウンジャミ・シヌグ

伊是名島（伊是名村）には内花・諸見・勢理客・仲田・伊是名の各集落がある（仲田は十八世紀中期以後、内花は明治以後の新集落）。伊是名島にもウンジャミとシヌグが

伝承されており、『琉球国由来記』には伊是名島のウンジャミとシヌグの記述がある。伊是名島のウンジャミ・シヌグは諸見・勢理客・仲田・伊是名の四集落が参加して行われているのでまとめて検討することとしたい。

まず伊是名島のウンジャミについてみる。『琉球国由来記』伊平屋島の項ではウンジャミについて、「海神折目一【割注】同月（十一月）、島中ニテ日撰仕り申。遊一日ノ事一。右、海ノ神御祭用ニ神酒・肴・餅相調、伊是名城御イベ前ニノロ・掟神申請、御祭仕り、ヲエカ人・サバクリ、御拝四ツ仕也。由来不伝」³⁰⁾と記されている。この大意は、海神折目は、十一月、島中で日を撰び一日遊ぶ行事で、海の神の御祭用に神酒・肴・餅をととのえ、伊是名城の御イベの前にノロ・掟神（ノロの次位の神女）を招き、御祭申し上げ、役人（ヲエカ人・サバクリ）が、御拝を四回いたす。由来は伝わっていない、というものである。

『伊是名村誌』はウンジャミについて、「海神折目は、本村では、盆後間もない七月十七日に行なわれるが（中略）、シヌグが十八日に行なわれる。この日各戸から新米でこさえたサニン、クバ（蒲葵）の葉包みの一合餅一個、五勺餅二個ずつを各戸から献納すれば、神職たちが伊是名城跡の三イベに豊漁の祭を行ない、続いて伊是名のアシアゲで白装束に白八巻をしめて海神を拝し、スク網を立て、「伊是名イノー一ぱいよっている」と、はやし立てながら大撈の擬（擬カ）装をして祈願祭を終る」³¹⁾と記している。『琉球国由来記』が編纂された十八世紀初頭頃は十一月に実施されていた伊是名のウンジャミは、いつの頃からか七月に変更されたようである。また、十八世紀初頭頃から今に至るまで、伊是名のウンジャミは伊是名城で行われてきたことがわかる。

『伊是名村史 下巻』によると、ウンジャミ当日の旧七月十七日午前十一時頃に字仲田の神アシアゲに村中のノロや掟神（ウッチガミ）等の神人が集まり、伊是名城上の石川（イシガー）の前の拝所仲田・諸見の庭（『琉球国由来記』は「イベ」）に餅や酒を供える。ノロ、掟神、シザン神（伊是名）、銘苅家から出た神人の四人は白装束を着て、十一時頃四人による拝みが始まる。拝みがすむと神酒、お供え物をいただく。正午頃再び拝みがあり、男神二人は後方でノロたちの拝みにあわせてミスバイ（三十拝）をする。次に勢理客の庭（イビ）に行き、仲田・諸見のイビと同じ拝みをする。城上の拝みがすむと城から下りて伊是名のイビを遙拝する所へ行く。午後二時頃全神人が集まって祈願をし、しばらくして再度祈願をし、男神二人がミスバイ（三十拝）をして拝みは終わる。仲田・諸見の神人はチンシガニクに行って拝み、ウンジャミは終わる、とある³²⁾。

また、『伊是名村史 下巻』ウンジャミの項に「神職者たちが伊是名城跡の三イビで豊漁の祭を行ない、続いて伊是名集落のアシャギで白装束に白鉢巻をしめて海神を拝

し、スク網を立て「伊是名イノー一ぱい魚が寄っているよ」とはやしたてながら大漁の擬（擬カ）装をして祈願祭をしていた。諸見のアシャギでは神人たちが網を張っていて、周囲で見物している子どもをつかまえ、網の中に入れて「魚ドーイ、魚ドーイ」ととなえて漁のまねごとをしていた」³³⁾という記述がある。この所作は、野甫のウンジャミの魚捕りの所作に類似している。野甫のウンジャミの魚捕りは竿による釣りであったが、伊是名のウンジャミでは網による魚捕りとなっている。また、周囲で見物している人たちを巻き込んではやしたてながら所作をするところも似ており、注目される。

次に伊是名島のシヌグについてみる。『琉球国由来記』伊平屋島の項ではシヌグについて、「シノゴオリメノ事一【割注】七月、島中ニテ日撰仕申。遊一日ノ事一右、アクマハライトテ、男童十人程、アマミ壺人、桐衣・袴着テ、白サジ、シレタレ結ビシテ、手々ニ棒ツキ、アマミ人、並其日ノ年ナフリノ人、弓矢持、先立仕「オナヂヤライハウ エイヤイハウ」ト唱テ、家々ニ入り、又、島ノニシ崎マデ行テ、ネヅミヲ取り、年ナフリ持タル矢ノサキアテ、海ニ入レ捨テ、村ニ帰り、一所ニ寄合、神酒持寄祝申也。」³⁴⁾と記されている。この大意は、シノゴ折目は、七月、島中で日を撰び一日遊ぶ行事で、悪魔払いといって、男児十人ほど、アマミ神一人、桐衣・袴を着て、白鉢巻、シレタレを結んで、手々に棒をつき、アマミ神と其日の年ナフリの人が弓矢を持ち、先に立って「オナヂヤライハウ エイヤイハウ」と唱え、家々に入り、島のニシ崎まで行き、鼠を取り、年ナフリが持った矢の先をあて、海に入れて捨て、村に帰って一所に寄り合い、神酒を持ち寄って祝う、というものである。

宮城真治氏は「伊平屋村伊是名のシヌグ」に「△七月十七日 ウンジャミ祭／△七月十八日 シヌグ祭 ウナジャーレーともいう。／五才、七才、九才、十一才より三年間、カミウドキという。／桐衣、袴を着け、白サジ、竹や木の棒。／△午前八時、伊是名の比屋の殿に集る。比屋に導かれ伊是名城に登る。東に向って合掌。／伊是名の比屋をソーヤ神？ともいう。この祭の時はアマイ神（天降り）といわれる。／△ウナジャーレー ホーホーという。（鬼出よの義）／伊江島（ウニジレーという。鬼は出よの義）／内の人は皆外に。バラバラたたく。相撲をとったりする。／西方の海岸に行つて浴びる。／アサギ庭に集合。伊是名比屋から神酒がある（粥）。／各自弁当を開く。」³⁵⁾（傍線ママ）と記している。

『伊是名村誌』によると、七月十八日朝、各字のアマイまたはその代理人が弓矢を持って先立って、シヌグの年齢にあたった男児らにオナヂヤライハウハウ、ヒーヌーネーハウハウと歌わせながら、伊是名、仲田、諸見は伊是名城跡に、勢理客は天城山に行つて、大きな子は山に登り小さい子は麓にいて互いに叫び合う。下山して各字に帰り、八、

九名ずつ組分けをして、各家庭の上座から入ってオナザレハウハウを歌いながら台所から庭に出て、棒で戦って次の家に移る。各組の分担が終わると所定の場所で海水浴をして身を清め、アサギに帰って昼食後、ヒルマオナヂヤレーハウハウ、ヒースーネーハウハウを合唱してシヌグを終える、とある。また、シヌグは凌ぐの意味で、子どもが悪魔災難を凌いで丈夫に成人するのを祈願する祭だと述べている³⁶⁾。

これらから、伊是名のシヌグは、『琉球国由来記』（一七一三年成立）の記述内容と、昭和初年（昭和二年調査）の宮城氏の報告内容と、『伊是名村誌』（昭和四十一年刊）の記述内容があまり変わっていないことがわかる。ただし、現在では、高齢化による神役不在、少子化などのため、かなり簡素化されている。

伊是名島では、近年はウンジャミが旧七月十七日の一日間、シヌグは旧七月十八日の一日間（男児を祝う）となっているが、十八世紀初頭頃（『琉球国由来記』の時代）はウンジャミが旧十一月の一日間（日は動く）、シヌグは旧七月の一日間（日は動く）であったことがわかる。

結 語

以上で、伊平屋列島の有人島である伊平屋島、野甫島、伊是名島の三島に伝えられてきたウンジャミ及びシヌグという祭事に関する伝承と祭事をめぐる諸問題についての筆者なりの考察を終えることとする。

『琉球国由来記』の伊平屋島の項には伊是名島のウンジャミとシヌグの記述があるが、伊平屋島や野甫島のウンジャミ・シヌグの記述はない。しかし、本稿で検討したように伊平屋列島の有人島である伊平屋島、野甫島、伊是名島の三島すべてにウンジャミ・シヌグが行われていた。おそらく、『琉球国由来記』の時代にも伊平屋列島の有人島三島にウンジャミ・シヌグが行われていたとみてよいであろう。

伊平屋島田名集落では、近年はウンジャミが旧七月十七日の一日間、シヌグは旧七月十九日頃の一日間となっている。しかし、古い時代にはウンジャミが旧七月十五・十六・十七日の三日間、シヌグは旧七月十九・二十日の二日間行われた。田名のウンジャミは喜界島のノロが首里への航海の途中田名に避難した出来事が由来とされ、かつては神女二十人がすべて馬に乗って海岸まで行列するという大がかりな行事が行われていた。海岸で喜界島のノロを見送る部分は、神送りの意味を持っていると考えられる。田名のシヌグは、男児のみを祝う祭事であった。

伊平屋島我喜屋集落・島尻集落では、一人のノロが馬に乗って両集落を異動して祭事を行っていた。これは、島尻が我喜屋から分かれて成立したためとされており、このことから、我喜屋・島尻のウンジャミ・シヌグは同内容であ

った。近年はウンジャミが旧七月十六日の一日間、シヌグは旧七月十七日の一日間となっている。しかし、古い時代はウンジャミが旧七月十六・十七日の二日間、シヌグは旧七月十八・十九日の二日間か旧七月十七・十八・十九・二十日のうちの三日間であったようである。我喜屋・島尻のウンジャミは魚捕りや船漕ぎの所作があることから豊漁祈願の祭事とみられる。我喜屋・島尻のシヌグは古い時代は初日に男児・翌日に女児を祝う祭事であったが、近代では一日に簡略化され、男児・女児とも同日に祝うようになった。

野甫島野甫集落では、近年はウンジャミが旧七月十六日の一日間、シヌグは旧七月十七・十八日の二日間となっている。近年の野甫のシヌグは、男児は初日の七月十七日、女児は翌日の十八日に祝う祭事であった。野甫のウンジャミは豊漁祈願の祭事とみられる。また、ウンジャミには魚釣り、亀捕りの所作、シヌグには木馬に乗る所作があり、共に笑いを伴う雰囲気だったようで、注目される。古い時代の日程については、関連資料が少ないためよくわからない。本稿で示した野甫の事例は、今となってはもう採集できない貴重なものとなっている。

伊是名島の各集落（諸見・勢理客・仲田・伊是名の四集落）では、近年はウンジャミが旧七月十七日の一日間、シヌグは旧七月十八日の一日間となっている。しかし、十八世紀初頭頃（『琉球国由来記』の時代）はウンジャミが旧十一月の一日間（日は動く）、シヌグは旧七月の一日間（日は動く）であった。伊是名島のウンジャミ・シヌグは、共に伊是名城跡に登って祭事が行われている。伊是名島のウンジャミは豊漁祈願の祭事とみられる。伊是名島のシヌグは男児のみを祝う祭事であった。

伊平屋列島のウンジャミは豊漁祈願の祭事とみられ、シヌグは子どもの成長を祝う祭事とみられる。また、伊平屋列島のシヌグは、伊平屋島田名と伊是名島が男児のみを祝い、伊平屋島我喜屋・島尻と野甫島が男児・女児を祝う行事となっている。通常、琉球列島のシヌグは「男の折目」とされるが、伊平屋列島の事例では、シヌグは「男の折目」とまとめることはできないことがわかる。

琉球列島のウンジャミ・シヌグに関しては未解明の問題が多い。残された問題については今後の課題としたい。

注・文献

- 1) 『沖縄文化史辞典』（東京堂出版・一九七二）、「ウンジャミ」「シヌグ」の項。
- 2) 原田信之「屋蔵大主と鮫川大主―第一尚氏始祖伝説を中心に―」（「奄美沖縄民間文芸研究」第一七号、一九九四・七）・「琉球王朝始祖伝説―第二尚氏尚円王を中心に―」（「説話・伝承学」第八号、二〇〇〇・４）参照。

- 3) 原田信之「伊平屋列島における降臨神話」(「奄美沖縄民間文芸学」第一号、二〇〇一・3) 参照。
- 4) 原田信之「沖縄県伊是名島的美織所伝説」(「新見公立大学紀要三五」二〇一四・12、『国立劇場おきなわ上演資料集〈四十一〉仲村渠真嘉戸』〈公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団・転載二〇一六・12〉) 参照。
- 5) 『定本 琉球国由来記』(角川書店・一九九七)、巻十五～巻十六、参照。
- 6) 島袋源七氏『山原の土俗』(郷土研究社・一九二九)に「国頭村字辺土に於ては一年越に、旧七月二十日後の亥の日に、ウンギャミ祭を行ふ。俗に女の節句だといふ。即ち此の祭はウナイウガミといひ女を拝するのである。男を拝する祭は他にシヌグといふ儀式があつて、俗にウキーウガミと称へてゐる。此二つの儀式は毎年交互に行はれる」(三頁)とある。
- 7) 「民俗第四号」(琉球大学民俗研究クラブ、一九六一・10) 所収。
- 8) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村田名の男性(昭和十二年生まれ)。平成二十三年(二〇一一)八月十三日・原田調査、採集稿。
- 9) 原田信之「沖縄県伊平屋島の海神祭伝説」(「新見公立大学紀要三九」二〇一八・12) 参照。
- 10) 『伊平屋村 田名字史』(田名公民館、二〇〇三)、一三八頁。
- 11) 注7の「民俗第四号」所収。
- 12) 宮城真治氏「海神祭に就いて」〔宮城真治資料6〕(名護市史編さん室、一九九二) 所収「シヌグ祭に就いて(昭和4年8月)」。
- 13) 『伊平屋村史』(伊平屋村史発刊委員会、一九八一)、三三四頁。
- 14) 『我喜屋字誌』(伊平屋村我喜屋区、二〇〇六)の年中行事「七月」、「(五) ウンジャミ(海神祭・十六日)」の項、二三三頁。
- 15) 宮城真治資料8「宮城真治民俗調査ノート〈増補改訂版〉」(名護市教育委員会、一九九五)、九六頁。
- 16) 宮城真治氏「海神祭に就いて」〔宮城真治資料6〕(名護市史編さん室、一九九二)、八頁。宮城真治資料8「宮城真治民俗調査ノート〈増補改訂版〉」(名護市教育委員会、一九九五)の「田名の海神祭」の項に「ナレクといふのは、字の女子の九才のものより、のろがサーを当てて任命す。その勤めは三年間である。ナレクは各組に三人、都合六人である。ナレクは髪を後に垂れて、御下げの様に根本を結ぶ。白胴衣を着ける」(八一頁)とある。
- 17) 注13の『伊平屋村史』、三三五～三三六頁。注14の『我喜屋字誌』、「民俗文化」の「(七) シヌグ」の項、二一八～二一九頁。『島尻公民館建設記念誌 島尻のあゆみ』(島尻公民館建設事業期成会、二〇〇四)、一一〇

～一一一頁。我喜屋と島尻の字誌は『伊平屋村史』の記述をそのまま引用している。

- 18) 注13の『伊平屋村史』、三三五頁。
- 19) 注15の宮城真治資料8「宮城真治民俗調査ノート〈増補改訂版〉」、七九頁。
- 20) 注15の宮城真治資料8「宮城真治民俗調査ノート〈増補改訂版〉」、九六頁。
- 21) 注12の宮城真治氏「海神祭に就いて」〔宮城真治資料6〕所収「シヌグ祭に就いて」。
- 22) 注13の『伊平屋村史』、三三六～三三七頁。
- 23) 上江洲均氏『伊平屋民俗散歩』(ひるぎ社、一九八六)、一三〇～一三六頁。
- 24) 話者は沖縄県島尻郡伊平屋村野甫出身の男性(昭和四年生まれ)。平成二十三年(二〇一一)八月十八日・原田調査、採集稿。男性はメーイ神の伊豆味俊夫氏。
- 25) 伊豆味俊夫氏「野甫の拝所と年中行事」(「現代社会現場実習報告書第四号別冊」四国学院大学社会学部応用社会学科、一九九八、所収)。
- 26) 27) 28) 話者は注24の男性(昭和四年生まれ)。平成二十三年(二〇一一)八月十八日・原田調査、採集稿。
- 29) 田名の拝所の統合の経緯について「田名部落調査報告(伊平屋村)」に、「戦後、一九五二年に各拝所、各火神所を現在のウツカー御嶽の麓に鉄筋コンクリートのお宮を作り合祀して伊平屋祝女一人をお宮の司として、「全男女神を廃して、このお宮を田名神社と称した。」しかし、種々都合の悪い事が生じ、神の祟(祟カ)りだと元にもどす事を要求する声もあり一九五七年頃から、また元のように各々の拝所に神をお返しして、神人の制度も復活させ現在に至っている。廃止された種々の行事も又おこなわれるようになった。」(注7の「民俗第四号」所収)とある。
- 30) 注5の『定本 琉球国由来記』、四二七頁。
- 31) 『伊是名村誌』(伊是名村役所、一九六六)、二七一頁。
- 32) 33) 『伊是名村史 下巻(島の民俗と生活)』(伊是名村、一九八九)、四六九～四七一頁。
- 34) 注5の『定本 琉球国由来記』、四二五頁。
- 35) 注12の宮城真治氏「海神祭に就いて」〔宮城真治資料6〕所収「シヌグ祭に就いて」。
- 36) 注31の『伊是名村誌』、二七一～二七二頁。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会平成二十七年度～三十一年度科学研究費・基盤研究C・課題番号15K02222の成果の一部である。